

# 学道一如

発行 小樽双葉高校  
生徒会通信 2024年11月7日  
第45号

## バスケットボール部 ウインターカップ 北海道栄に2点差惜敗

バスケットボール部は11月1日、旭川市で開催された全道高校選手権大会ウインターカップに出場し、北海道栄高校と対戦した。前半は15点をリードして折り返したものの、後半追いつかれ、67-69の2点差で敗れた。3年生にとっては最後の大会となったが、山田監督は「走り抜いた」と健闘をたたえた。また、主将の長瀬華さんは「3年間積み重ねてきたことを出し切れた」と語った。



長さんは「相手のスリーポイントを防ぎ、縦のドライブのディフェンスを課題として練習してきたが、しっかりと守り切れた」という。山田先生も「落ち着いてプレーするよう、アドバイスしたが、前半のリードで後半は守りに入ってしまったのかもしれない」という。だが、プレーで全力を出し、声も出ている「楽しめた」試合だったと長さんは語った。引退にあたり長さんは「人数は減るけれど、山田先生を信じて頑張ってください」と後輩にエールを送っている。もうすぐ、新チームで戦う大会も控えている。

(写真は前列が3年生)

## 小樽再発見⑮ 博物館の一使命 昆虫から自然保護を考える

10月5日から連続講座「北海道の自然・歴史が形作った小樽を考える」(似鳥文化財団主催)が小樽芸術村で開催されている。第2回は「自然環境調査から見えてくる小樽の自然」と題し、大原昌宏氏(北海道大学総合博物館教授)が講演された。昆虫体系学の醍醐味、博物館の役割について考えさせられる興味深い内容だった。



大原昌宏先生(上写真)は北大で昆虫体系学を研究されてきたが、1991〜97年まで小樽総合博物館にも勤務され、現在は北海道大学総合博物館教授である。博物館の役割である資料基礎研究を重ねてきたが、特にエンマシ(右図)の体系学の権威で、世界に10人いる一人だ。



**博物館の役割▼調査・標本・データ・モニタリング**  
小樽では長橋なほ地区、奥沢水源地地区の昆虫相調査、また、ニセコ山系昆虫相調査をさ

れて、紀要にまとめている。月ごとの調査によると、昆虫の個体数が多いのは11月だという。雪が降る前に繁殖するからだ。帯広大山緑地など道内各地での調査も行ってきた。また千島列島の国際生物多様性研究調査にも参加し、8000点の標本を持ち帰り、種名を同定し、小樽市博物館のコレクションになっている。千島と北海道の昆虫との関連が解明された。

人類は2100年まで人口が増える見通しだ。増える人口が与える様々な影響が考えられる。外来種の増加、過剰採取、汚染、気候変動などだ。それを昆虫の分類学からも観察できるという。分類学は生物を特徴によって分類し、体系的にまとめ、生物多様性を理解するものだ。博物館の使命である、標本、データ、モニタリングには相当な労力が必要とされ、パラタクソノミスト(生物分類補助員)の養成が進められている。

**東日本大震災を昆虫から見る**  
大原氏は2010年に東北の海浜性昆虫の調査をしていた。翌年、東日本大震災が起き、津波で東北沿岸は壊滅的なダメージを受けた。2012年、2013年に再びその地域の調査を行った。2012年には減った海浜性昆虫は2013年には戻ってきたことがわかった。だが、その後、津波対策で防潮堤が建設され、その影響により、昆虫が減っていることも調査でわかってきた。仙台から福島まで120キロの海岸の多くが盛り土、かさ上げされているからだ。地震・津波対策は不可欠であろうが、その陰で生物多様性を大きく失う代償があることを知った。

**双葉の郷里**  
私は今回の修学旅行で様々な失敗を経験しました。その中でも特に学びになったと感じた関西自主研修での失敗を二つ紹介します。



京都タワー

一つ目は乗り継ぎです。初めての場所なのでこの駅で降りれば良いかは分かっていても、その駅に辿り着くまでの乗り継ぎがうまくいかず、かなり苦労しました。私はICカードやキタカなどのアプリを使っていないので切符で乗り継ぎになったのも原因だったと思います。

二つ目は京都タワーへ行った帰りのことです。私たちのホテルは駅を挟んで反対側にあったため、京都駅を通り抜けようとしたのですが、京都駅がかなり迷宮となっていて簡単に出入りできませんでした。残り三分なら余裕で間に合うと思っていました。が、本当にギリギリになってしまいました。

これらの経験から言えるアドバイスは、特に道に迷いそうな所を調べることです。後で先生に聞くと、やはり京都駅は有名な迷いスポットだったようで、このような迷う定番スポットなどを事前に調べたならば、対策は十分に可能だったはずなんです。しかし、最終的には楽しい修学旅行で終わることができたので良かったと思います。